

## 第2章 天草の民間信仰と白龍大神

張 麗山

### はじめに

江戸時代初期の寛永14年（1637）、徳川幕府に大きなショックを与えた「天草島原の乱」と称される一揆が起こって以来、天草は隠れキリシタンの宗教文化が根強く、内外の人々の観念に残るようになった。ところが、この乱は僅か半年だけで終焉を迎え、日本の政治史や宗教史などで象徴的な意義があるといっても、それだけを注目すれば、民間に潜む古くからの信仰を見逃すおそれがある。筆者は天草でフィールドワーク調査をする時、特に民間信仰に関心を持って見聞を深めた。牛深や長島などはもともと隠れキリシタンの影響が弱く、これらの地域の民間信仰から古代より伝承してきた天草の宗教信仰を復元することは可能だろう。本稿は天草の民間信仰を紹介し、天草に隣接する三角で見た白龍大神に対して日中文化の比較や交渉の角度から考察してみる<sup>1)</sup>。

### 一、天草に点在する民間信仰

#### 1、長島の民間信仰

長島は九州西岸に位置し、現在は鹿児島県の一部とされているが、戦国時代以前は天草の島々と一体に結びつき、同じ行政区域に属するところであった。今でも、長島から牛深を間近に見ることができ、船で半時間ぐらいの距離である。だから、歴史文化的に考察すれば、長島は天草と深く関わりあい、看過できない地域である。筆者は7月25日と8月の30・31日に長島へ行き、古文書の撮影をする傍ら、当地における民間信仰についても伺った。長島町歴史民俗資料館で山崎友喜氏が筆者が関心を持つ部分を親切に教えてくれた。その内容は次の通りである。

長島には竈神の信仰がなさそうである。少なくとも近代にはなかった。ただし、小さい頃、竈で祀ったことがあったが、その祀りは竈だけで行ったのでない。家のどこでも、また屋外で祀ったこともある。だから、それは竈神を祀るとは言えない。

一方、このあたりには山岳信仰がある。むかし、ここでの宗教は主に真言宗と曹洞宗であった。特に真言宗はかなり昔から信仰されてきたと思う。昔は、山伏<sup>やまぶし</sup>がよく見られた。山伏は相当古い時代から現れた修行者で、このあたりの山で修行していた。山伏は各地を歩きまわって占いをしたり、祈祷などを行ったりする。みんな、彼らを怖がっている所がある。山伏は地位の高い人で官人であ

1) 恵比寿や金比羅信仰については、本書第3部第3章の陳曉傑氏の論考を参照されたい。

り、武士である。また、つい最近まで古い女性がいた。彼女らは、もともと普通の人間であったが、40代の頃に突然神様に憑依され、占うことができるようになったそうである。村の人が聞きに行くと、結果が当たった時がよくあった。彼女らはそういう仕事をしてから、生活が貧しくなった。ところが、ほぼ20年前にこれらの人はいなくなった。

最も特色の深い民間信仰は山神信仰である。山神の神体は木であり、山にある木を神として注縄で囲み、祭りの日に村人が行事をして、一緒に祀っていた。当地の人に神はどうやって山に帰ったのかと聞いたことがある。神は煙に乗って山に帰るのだと答えた。この山神の信仰はかなり古めかしい時代に遡り、天草にも相似する信仰があるようだ。

また、長島には庚申碑が数十箇所に残っている。昔の人は、人間の体に三尸の虫があり、庚申の日に天に上がって天帝に悪口を言って、人の寿命を縮めると思っているから、その日に三尸の虫を体から出ないように徹夜すると言われていた。それは中国から伝わった信仰であるのか。昔は、このあたりでかなり盛んに信仰されていたようである。

長島の山の神の信仰について、資料館に「長島の山神」、「小浜の山祭り」、「唐隈の山祭り」などのセクションで写真と文章で解説している。山の神は古くからあり、また日本全国に広がる信仰である。ネリー・ナウマンが『山の神』で「青森から鹿児島におよぶ全土全域において、山の神が特定の木に降りると信じられている」女神で、助産・病氣治癒・好色などの特徴をもつと述べた<sup>2)</sup>。長島の山神信仰がその好色性の特徴が大きくて、女性の参加が禁止されるし、男性の山神祭りが実際にはプロポーズの場所になっていたそうである。山神信仰には日本古来の穢れ思想が見られ、祈りも穢れなどを祓ってもらうと表現されている。例えば、唐隈の「山祭りの唱えことば」を読んでみる。

唐隈の山祭りの唱えことば

今日霜月、清きとうとき日をえらび

唐隈区内の山々の神祭りを致します

前山九郎殿 九百九十九大将

中山九郎殿 九百九十九大将

後山九郎殿 九百九十九大将

今年の新米であまご水ごくうきよめて

ゆうべ生まれた赤子より今日なくなる年寄りまで

山に行ってもしもけがあやまちがあった時は

きよめたまえはらえたまえと申します。

新しい米や清い水で山の神に供えて、「けがあやまち」を清めやお祓いをしてもらうのである。そういう古朴な考え方として、山神の移動についても興味深い。山神が煙で山に戻るという考え方は日本だけでなく、中国の民間信仰にも適用できる。周知のように、中国古代では燔柴で天を祭る儀式がある。燔柴とは柴を焚いた煙で祭ることである。何でも煙に乗って上天すると思ったのであろう。また、中国の民間信仰に竈神があり、年末に天に上がって悪口を告げると信じられる。その竈神の由来について、

2) ネリー・ナウマン『山の神』（野村伸一・檜枝陽一郎訳、言叢社、1994年）、67-84頁。

かつて津田左右吉が、「煙を天に上るものとするのも、原始的の考えかたであるから、竈神が天に上るというのも、或はかなり古い時代から言い伝えられたことであるかもしれぬ」と述べた<sup>3)</sup>。津田のこの発想もむしろ日本の古来から伝えられたものであるまいか。

長島に庚申碑が残っているのも面白い。庚申信仰は道教の信仰であり、六朝時代の葛洪『抱朴子内外篇』に

身中有三尸、三尸之為物雖無形而實魄靈鬼神之屬也、欲使人早死、此尸當得作、自放遊行饜人祭酹、是以每到庚申之日、輒上天白司命道人所為過失。

と記していた。だから、庚申日の夜にみんな三尸を天に上らないように徹夜をする。長島の庚申碑もそういう信仰の名残といえよう<sup>4)</sup>。ただし、長島という日本全国からみると周辺の地域において庚申信仰が盛んに行われたことが興味深い。

## 2、牛深の民間信仰

天草市牛深町は、昔から漁業を主たる生業とするところであり、宗教は主として仏教である。例えば、真浦・加世浦地区は浄土真宗の信徒が多い村落である。ただし、漁業の信仰については、恵比寿や金比羅が挙げられる。ここでは、船玉様と「ゆうし信仰」について紹介してみよう。

船玉様は船の神である。地元住民によると、昔、船を作るときに、大工さんが木で船玉さまを作って密封して船のアブ棚に納める。その船神は取り出してはいけない。船が廃棄されたら、その船神もいっしょに祀られなくなる。また、海に出るときは、いつもこの船神に対して平安などを祈願する。これについては、昨年为天草調査で当地の船大工だった田畑澄夫氏が船玉様の実物を見せて「10×5×5cmほどの蓋つきの木箱で、中には川やなぎ材でできたサイコロ2個・幼児の髪の毛などが収められており、このほか月の数だけコインを入れるということだった」と紹介した<sup>5)</sup>。こういう船玉様信仰は日本の漁業・海運関係の各地によく見られる。田村勇氏が「船霊を船に祀りこめることを、ゴシンを入れるというのも広くいわれており、これは、船大工が行う秘事とされている。船大工のこの秘事には、かつては修験が介在した形跡も認められ、船霊祭文や祝詞なども残っている」と日本の一般的な船霊信仰を紹介した<sup>6)</sup>。前述したように、長島には山伏などの修験者がいたと言われたが、彼らは牛深にも来たことが推測される。船霊信仰にも彼らの活動の痕跡が見られるのである。

この船霊神に関連として、天草市御所浦町に祀られていた女神を紹介したい。それは顔色が真っ白で、青い服を着て、あぐらをかく女神の神像である（写真1）。そして、左手に棒、右手に玉を持っている。この神像も言うまでもなく近年新しく作られたものであるが、その信仰はかなり古い時代に伝わってきたと思われる。御所浦が漁村として祀るのは海の神であろう。そして、海の神では中国に媽祖信仰があ

3) 津田左右吉「シナの民間信仰における竈神」（『東洋学報』32-2、1949年）、14頁。

4) 日本の庚申信仰については、窪徳忠『庚申信仰の研究：日中宗教文化交渉史』（第一書房、1996-1998年）を参照のこと。

5) 井上充幸「天草フィールドワーク生業調査の成果」（『天草諸島の文化交渉学研究』、関西大学文化交渉学教育拠点）、88頁。

6) 田村勇『海の民俗』、雄山閣、1990年、73頁。

り、古くから日本に伝来している。藤田明良氏によると、

日本の媽祖信仰の特色は、華人だけでなく日本人の船乗りたちにも信仰が広がったことにある。(略)十六世紀後半には(薩摩の野間山)山上に媽祖像が祀られ、鎖国後も「娘媽権現」とよばれて周辺の漁民や船運業者の信仰を集めた。後に長崎の野母崎でも「日山権現」として媽祖像を祀り、また壱岐にも漂着船の船頭媽を祀るカラカミ神社が登場する。(略)十八世紀には、船の霊である船玉を人格神として図像化することが流行するが、船玉神を女神と信じる船乗りたちには、媽祖をモデルにしたものが人気であった。<sup>7)</sup>

御所浦の神像が媽祖ではないが、女子の身なりや、また観音様のようにも見える姿から、もしかしたら媽祖から影響を受けたものであろうかと推測される。それは、船玉様のように、海を出る漁民の安全などを守護する神とも思われる。

また、仏教の影響で、天草では彼岸の中日を特別の日として取り扱う。例えば、今でも天草市五和町では彼岸の中日に墓や寺へ参ったり、彼岸団子を食べたりする<sup>8)</sup>。そして、吉川茂文さんによると、牛深では特に「ゆうし信仰」がある。昔、彼岸の中日に、夕日が沈むときに、5人ないし10人の後座(信者)が高台で正座をして、鐘をたたく。かつては、白の服装を着て、舞いながらするといったが、今は普通の衣服を身につける。吉川さんは「今は、できる人が少なくなってきた」と嘆いた。

### 3、三角の白龍大神

筆者は7月31日に天草に隣接する三角の港近くで、「白龍大神」の大文字を掲げた掛札を見た。近づいて見ると、小祠があり、掛札はすなわち小祠の前に立てられている(写真2)。龍神は中国で偉い神として崇められているが、ここでなぜこんな小さな小祠で祀られていたのか。そういう疑問を抱えて、隣の屋敷の主人に伺った。それで以下のような由来談を聞いた。

十数年前に、息子が中学校で、サッカーをしていたとき、眼を怪我した。それから、オカミサンに伺えば、それは、この屋敷の地下に白い蛇があり、蛇が祟ったためである。その白い蛇はこの屋敷が建てられる前に、すでにここに鎮座している。この土地を利用して、白龍大神を邪魔したから、祟りを行った。だから、それを祀ればいいと教えてもらった。このようなことで、山に登って、縁のいい石を拾って、屋敷の前に神棚で供えてきた。その神棚も自分で作ったものである。そして、そのころから、毎日神棚にある卵や塩などを交換して、新鮮なもので白龍大神を供える。

この白龍大神の正体は白い蛇で、屋敷の土地に鎮座しているとわかった。十数年間絶えず白龍大神を奉祀することはかなり信仰心が深いと思われ、筆者も感動を覚えた。その神棚をよくみると、さすがにきれいに作られたものだった。神棚の奥には不規則で、表面も粗い石が祀られている。石の前に正方形のテーブルがあり、上に塩・米・卵・水などが納められている。テーブルの前に1本の白い蝋燭であり、その傍に日本円のコインが置かれている。実は白い蛇を神様とする民間信仰は上天草市域にもあり、次

7) 藤田明良「媽祖—航海信仰からみたアジア」(『季刊民族学』133、2010年)34-35頁。

8) 『五和町の民俗「聞き書集」』(熊本県天草郡五和町教育委員会、2000年)371-449頁。

のような指摘がある<sup>9)</sup>。

賤之女のK氏は不思議な霊力があると言われている。熱が出た時にK氏に見てもらうことがある。

白蛇を神として祀っているので皆ミイノカミサン（巳の神様）と呼んでいる。

それはK氏という民間宗教者が唱えた神である。そのK氏が前述した長島の占う女性と何か関係あるかどうかは確認できないが、この白龍大神の信仰は三角や上天草だけでなく、大阪にも存在する。たとえば、大阪市営地下鉄中央線の九条駅（大阪市西区）の三番出口を出てすぐのところに類似の白龍大神を祀る小祠がある。また、大阪市北区神山町にある綱敷天神社の白龍社も白龍大神を祭神としている。白龍大神について、綱敷天神社のホームページでこのように紹介している<sup>10)</sup>。

白龍という名からも読みとられますが、龍神または白蛇の神様です。（略）この当神社でお祀りされている白龍大神は（略）いわゆる家を護る屋敷神であり、今も古い旧家などでは白龍様として神棚等に祀られています。（略）縄文時代から奈良時代までの日本人の住居に由来する信仰と言われ、（略）家には蛇が住んでいて家を護ってくれているとい信仰が生まれ、今の屋敷神信仰となったようです。当社では、社殿を護り、境内を護る神と同時に、氏地を護る神として信仰されています。

この紹介を読んで納得する一方、「縄文時代から奈良時代までの日本人の住居に由来する信仰」については少し理解に苦しむ。蛇はさておき、龍神という観念はそもそも中国で発生したもので、白龍大神という名前と呼ばれる以上、外来的な龍神思想から影響を受けたのではないか。このような仮説から、白龍大神についてもっと調べて、東アジアにおける白龍大神は一体いかなる由来があるのかを究明してみよう。

## 二、文化交渉における白龍大神

### 1、中国古代における白龍観念

龍は中国で古くから信仰されてきた神聖な動物である。その起源はさまざまな説があるが、李均洋によると、代表的なのは、聞一多のトーテム合併説である。<sup>11)</sup>

龍は一種のトーテムであり、そしてトーテムとして存在しているが、生物界の中には存在していない虚構された一種の生物である。というのは、龍は様々な相違しているトーテムより合成された一種の総合体である。龍のトーテムは、その局部は、馬・犬に似る、あるいは魚、鳥、鹿に似るにもかかわらず、その主な部分と基本的な形態は蛇である。これは最初その所トーテムの林立している時代にあって、その中の蛇トーテムは最強大であったが、所トーテムの合併と融合は、この蛇トーテムのいろいろな弱小トーテムを兼ねしたり同化した結果である。

ただし、このトーテム合併説にはまだ検討する余地があるが、龍と蛇との間に緊密な関係があるのは間

9) 安田宗生『島の暮らしと祭り』（熊本県上天草市、2008年）172頁。

10) <http://www.011.upp.so-net.ne.jp/u-shirae/yuisyo/gosajjin-hakuryuu.html>。

11) 李均洋『雷神・龍神思想と信仰』（明石書店、2001）259頁。

違くない。

中国古代の龍は神聖的なもので、天地を往来したり風雨を吞吐したりして帝王などの権威を象徴する。ところが、白龍については記載が少ない。歴史書によく見られるのは黄龍や青龍である。白龍の観念は五行思想による五龍にしか見られない。また、白蛇についての記載も少ない。よく物語られたのは劉邦斬白蛇のことである。

高祖被酒夜徑澤中、令一人行前、行前者還報曰、前有大蛇當徑、願還、高祖醉曰、壯士行、何畏、乃前拔劍擊斬蛇、蛇遂分為兩、開行數里、醉、因臥、後人來至蛇所、有一老嫗夜哭、人問何哭、嫗曰人殺吾子、故哭之、人曰、嫗子何為見殺、曰吾子白帝也、化為蛇當道、今為赤帝子斬之、故哭。人乃以嫗為不誠、欲答之、忽不見。後人至、高祖覺、後人告高祖、高祖乃心獨喜自負。

つまり、白帝は蛇に化けて劉邦の道を阻んだが、赤帝の子である劉邦に斬られて死んだ。ここで、白い蛇と言わなかったが、白帝の子なので白蛇と思われた。五行思想によって、西の方は五色の白で、西のものが何でも白いと思われたからだ。だから、ここでの白蛇はただ五行思想によるもので、土地や守護などと関連がない。

ところが、仏教が中国に伝わってきた後、中国の龍神も守護神という新しい神格を持つようになった。古来インドには、ナーガと呼ばれる蛇の表徴がある。そして、仏典における「ナーガ」を中国語に訳された時、ほとんど「龍」や「龍王」に訳された。したがって、仏教の龍神思想から影響を受け、中国の龍神思想もまた蛇と深く関わるようになった。そして、白蛇が守護の役割としてしばしば仏教經典に現われた。

馬衡。(略) 每在廬中宿臥。恒有大白蛇。曳身廬屋上。垂頭臨戶。若欲出入。蛇即縮頭避之。如是為恒。不至侵害。狀如守護。(『弘贊法華傳』)

釋慧明。(略) 後於定中見一女神。自稱呂姥。云常加護衛。或時有白猿白鹿白蛇白虎遊戲塔前。馴伏宛轉不令人畏。(『高僧傳』)

釋德秀。(略) 及終於定山頗多靈異。則天寶初載也遷神座入塔(略) 鄉人云。恒有白蛇蟠屈守塔。樵牧之童無敢近者。(『宋高僧傳』)

これらの記載はいずれも白蛇を守護者として描かれた。清潔である白色を好む仏教は白蛇を守護神とすることが好ましいでないかとも推測される。そして、蛇は即ち龍である。『高僧傳』巻六に、こういう記載がある。

釈慧遠。(略) 遠詣池側讀海龍王經。忽有巨蛇從池上空。須臾大雨。

ここで、巨蛇を海龍王と思っていたであろう。したがって、前述した白蛇もすべて白龍とも称せられ、即ち守護神の白龍である。

続いて、仏教の守護龍神が中国の土地信仰と習合して土地守護龍神になった。中国古来の土地守護観念によっては、青龍・朱雀・白虎・玄武との四神が四方から守ってくると思っていた。したがって、地上の宮殿や家屋などは四神相応の地を選んで建て、地下の墓も四神を設けて墓を守らせる。一方、土地信仰による土地神の神格の上昇により、土伯に頼んで墓を守ることもある。更に、仏教の守護龍神の思想から影響を受けて、五方龍神で墓を守ることもあった。勿論、それは墓の土地を守るだけでなく、屋敷の土地も守る。現在、特に中国の南方である広東省や福建省にはまだ五方土地龍神を祀るところがみ

られる。

## 2、日本古代における白龍観念

日本の龍神思想はいうまでもなく中国から影響を受けたものである。ところが、蛇の信仰はずっと古い時代からあった。したがって、日本固有の蛇信仰と外来の龍神信仰をどのようにみるべきか。ここで、三角でみた屋敷の崇る神でありながら守護神である白龍大神の神格を信仰文化変容の一つの終着点として、その歴史をさかのぼってみる。

龍神信仰が早くに大陸から日本へと伝わった。金子量重氏が「蛇と龍—土着の思想と舶来の造形—」で、蛇の伝承や造形が龍より早く存在したと蛇の土着性を唱えながら、

龍が我が国にあらわれるのは、仏教が渡来した奈良時代と言われてきたが、実際には弥生時代にまでさかのぼる資料も発見されている。たとえば、大阪府の船橋遺跡や池上遺跡出土の弥生土器の長頸壺に、龍とおぼしき図柄がヘラ描きされている。最近奈良県の唐古鍵遺跡から発見された、楼観を描いたと見られる土器片と同じヘラ描きである。すでにアジア大陸から渡来した人達の生活様式を、具体的に吸収していたことが分る。<sup>12)</sup>

と述べている。これにより、日本における龍神信仰の早さを認めざるを得ない。ただし、金子氏が日本の龍神信仰の受容について「水稻耕作関連と仏教関連の二つの流れだが、前者は水神としての蛇、後者は権力の象徴としての龍という形で入った」と述べたが<sup>13)</sup>、筆者はそれには賛同できない。前述したように、仏教において龍は主として守護神の象徴である。仏典にある八部龍王なども本来悪い種族であったが、仏様の教えに感化され、仏法を守る神になったのである。権力の象徴としての龍は中国固有の思想に由来し、神仙思想とも深く関わっている。したがって、日本における龍神思想も神仙思想と仏教に大別できる。有名な浦島太郎の物語も神仙思想の影響を受けて龍女との出会いなどを創出したのだろう。

しかし、最も日本の龍神信仰に影響を与えたのはやはり仏教である。そして、仏教における龍神は主として水神として祀られている。例えば、平安初期の天長元年（824）に、空海は天皇の勅命により神泉苑で善女龍王に勧請して、祈雨を成功した。仏教で祈雨の祭祀はほとんど龍神に勧請したものである。そして、仏教だけでなく、陰陽道においても、龍神を水神として、五龍祭などを行なって祈雨する。

一方、中国の陰陽五行思想と習合した五方龍王の思想も陰陽道や修験道を経由して日本に受容された。蛇が怖いもので、日本でも古来から崇る神として祀られていた。記紀神話で八岐大蛇に少女を捧げる物語がそういう信仰の表れだといえよう。また、日本の宮廷祭祀には古くから地鎮祭や宅鎮祭があった。地鎮祭は神道での鎮魂祭などのように鎮詞を読んで儀式を進められたものである。鎮詞は「大抵の場合には土地の精霊が、自由に動かさぬように、居るべきところに落ち着ける言葉になってゐる」のである<sup>14)</sup>。そして、土地の精霊については、次のような指摘がある。

地中であって容易に滅気しない潜在力がおもわぬに不意に顕現するのが、荒神である地霊の類であ

12) 金子量重「蛇と龍—土着の思想と舶来の造形—」（『アジアの龍蛇』、雄山閣、1992年）16頁。

13) 同上。24頁。

14) 『折口信夫全集』第三卷、中央公論社、1955年、235頁。

る。地霊は、五龍王・五帝龍王・水神・地神・土公・土府・地府、さらに、大地母神たる堅牢地神・弁才天・宇賀神や、即自的な名を持つ正了知蛇・毒気神王や、三宝荒神・竈神に、麻多羅神などの後戸の神・若宮などと、さまざまな顕われ方をする。そして、それらはいずれも蛇形をとるか、蛇を秘めているのである。<sup>15)</sup>

地霊は様々な異名があるが、その形はほとんど同じく蛇の形をしている。つまり、蛇は地中の精霊で、時々祟を起こる荒神である。それは、ほぼ神話時代から底流として信仰されてきたものである。ところが、そういう地霊を龍と呼ぶこともある。例えば、鎌倉か室町時代に成立した『篋篋内伝』に土公のことについて、

爾土公三千大千世界主堅牢大地神也。所謂土公之變作者、當季安座舎也。此故不犯安座也。將又龍臥變化者、腹背頭足之四威儀也。柱立尤一三四之相承有之肝要也<sup>16)</sup>

と記した。ここで土公は地の神が、龍から変化したものである。実は、そういう観念が単に龍と蛇との形の類似性から来たものではないと思われる。前述したように、中国古代では仏教の影響を受けた龍がすでに土地の守護神の神格を持つようになった。日本にも類似の信仰が見られ、よく龍神と土神とを並列する。鎌倉時代に成立したと思われる『神道五部書』に、次のような記載がある。

大宮柱（號忌柱。亦名天御量柱。亦曰心御柱。是則皇帝之命國家之固。神明之德也。故龍神土神各一座。為守護神。）

亦劔者。土精金龍神所造也。弓箭者。輪王所造。

つまり、劔は土の精である金の龍神が作ったものである。また、龍神と土神を設けて守護神とする。ここでの土の精である龍神と守護神としての龍神とは違っているが、当時の土神と龍神の概念の混淆を示した。そして、明確に白龍を守護神とした記載もある。

亦御倉神（稻靈豐宇賀能賣命。宇賀能美多廣神。保食神。尊形一床坐。以白龍為守護神也。凡王子八柱。同座給也）。亦酒殿神。宮中大小神祇四至神等鎮理定理座居由。

これらの龍神観念は前述した神仙思想関係の聖物や水神というより、むしろ土地の守護神であろう。こういう龍神観念の変遷は土公や五龍王およびその底流にある崇る蛇の信仰の伝播と深く関わる。それは、外的に仏教や陰陽道などによる東アジア文化交渉の結果であり、内的に神霊信仰の善悪両義性によるものである。

白龍大神の信仰はその根底に恐ろしい蛇の祟を恐れて祀っているが、外来的な守護神としての龍神への期待で白龍大神として平安や健康を守ってくる祈願からきたものであろう。民間信仰における白龍大神は、このような多彩な信仰を歴史的に積み重ねてきた複雑な構造をもつといえよう。

## おわりに

天草は日本において周縁地域だといえるが、以上の民間信仰に関わる考察から見えるように、日本本

15) 岩田勝『神楽源流考』、名著出版、1983年、137頁。

16) 中村璋八『日本陰陽道書の研究』、汲古書院、1985年、289頁。



土の共通要素だけでなく、中国の文化因子も数多く見られる。庚申信仰のようにそのまま中国から伝わってきたものもあるし、白龍大神のように根底に日本古代の蛇信仰であるが仏教や中国の龍神思想から影響を受けて再生したものもある。民間信仰は、仏教やキリスト教などの教義或は集団宗教と異なり、高層な宗教理論がなく、ただ漠然として人々の心に宿すものである。白龍大神は日本古来の信仰でありながら、その上に中国やインドの龍神観念をも吸収してきた。そしてそれは三角だけでなく、天草や大阪などでも存在する民間信仰へと展開した。三角で見たこの白龍大神は、あたかも日本の古来伝統を継承しながら絶えず新しい観念を吸収する文化エコロジーの縮図である。



写真1 御所浦の女神



写真2 三角の白龍大神

